



ラフカディオ・ハーンの再話文学—西洋との葛藤の縮図として

木田, 悟史

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-03-25

(Date of Publication)

2013-12-16

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5737

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005737>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 ラフカディオ・ハーンの再話文学
—西洋との葛藤の縮図として

氏名： 木田悟史

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 山本秀行 教授
(副) 菱川英一 教授
(副) 大津留厚 教授

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) は、日本の怪談や奇談を英語で書きかえ、それを自らの作品とした。その手法は再話と呼ばれている。しかし、ハーンの再話は、単なる既存の物語の脚色にとどまるものではない。ハーンが日本にやって来るまでには、生まれ故郷であるギリシャからの長距離の移動があった。作品の制作に取りかかる前に、そのもとになる物語を集めなければならなかった。集めた物語は、当の日本人でさえあまり目を向けることのない古びたものだった。そして、それを英語という外国語で書きかえた。書きかえの際には、妻である小泉セツに原話を口述させた。さらに、先行作品を書きかえることで生まれたハーンの再話作品も、後世の人間によって書きかえられた。

日本時代に限らず、ハーンが作家としての生涯をかけて行ったことは、近代化の波にのまれて滅びゆく運命にある文化を称えることにより、西洋中心的な思考や振る舞いを批判、相対化することであった。そして何より、彼自身そこから逃れることだった。しかし、それは決して容易に成し遂げられることではなかった。

西洋とのせめぎ合いの中でハーンが陥った危機も、そこからの「脱出」の試みも、日本で取り組んだ独特の再話文学を分析することで最もよく見えてくる。再話文学とは、ハーンと西洋との葛藤の縮図である。これが、本論の全体を通した主張である。以下、各部および各章の概略を示す。

第1部「再話の成立条件としての「収集」と「移動」—ラフカディオ・ハーンと西洋帝国主義」に収めた3つの章の目的は、ラフカディオ・ハーンの再話文学の前提にある「移動」と「収集」という行為の意味について考察することにより、ハーンと西洋世界との結びつき方を確認しておくことである。

アメリカ南部の都市ニューオーリンズで本格的に作家活動を始めたときから、ハーンの仕事は収集に支えられていた。これはつまり、日本で再話作品のもととなる物語を集めるまでに、ハーンは収集のエキスパートになっていたということである。第1章「アメリカにおけるラフカディオ・ハーンの収集活動」では、ハーンの収集家としての徹底ぶりを、同時代のアメリカ南部作家との比較を通して論じる。第2章「日本におけるラフカディオ・ハーンの収集活動」では、日本時代に焦点を移し、引き続きハーンの収集活動を追う。アメリカ時代から日本時代まで、ハーンは作家としての生涯を通して収集という行為を続けていた。その目的は、近代化という強大な力にのまれて姿を消そうとしていた文化を保護することだった。しかし、一方的な知識の収集とは、帝国主義諸国が他者を支配する際に依拠した行為でもあった。つまりハーンは、近代西洋に背を向け、それを批判するために帝国主義的に振る舞わざるを得なかったのである。第1

章と第2章では、再話の成立要件である「収集」について考察することで、ハーンと西洋とのこの複雑なつながり方を明らかにすることを旨とする。

第3章「ラフカディオ・ハーンの移動の仕方—ラドヤード・キプリングとの比較から」では、ハーンの再話のもうひとつの成立要件である「移動」という行為について考察することにより、同じくハーンと西洋とのつながり方を論じる。ハーンの移動は西洋からの逃亡、「辺境」への移動だった。その目的は、近代化によって失われつつあった多彩な文化を描くこと、そして、それを通して西洋文明の画一性を批判することだった。そのためにハーンは、世界規模での交通機関の発展を最大限に利用した。しかし、その発展は、他ならぬ西洋文明によってもたらされたものだった。第3章では、ハーンと対照的な作家としてラドヤード・キプリング (Rudyard Kipling) との比較も交えながら、先行する2つの章と同じ論法でハーンが陥った危機を指摘する。

ハーンの再話文学の目的は、西洋中心の思考様式では十分に捉えきれない価値観や美の存在を示すことだった。しかし、この西洋中心主義を相対化しようとする試みは、日本での再話によってのみ行われたのではなく、ハーンが作家としての生涯をかけて取り組んでいたことだった。日本での再話は、いわばその集大成なのである。第II部「再話への助走段階—ラフカディオ・ハーンの作品にみる西洋中心主義の相対化」では、このことを論証するために、3つの章を設けて論じている。

まず第4章「ラフカディオ・ハーン『チータ』におけるクレオールと辺境について—ジョージ・ワシントン・ケイブルとの比較から」では、ハーンが初めて書いた小説である『チータ』の分析を行う。具体的には、アメリカ南部ローカル・カラー文学を代表する作家であったジョージ・ワシントン・ケイブル (George Washington Cable) と比較することにより、『チータ』(Chita, 1889)に描き込まれた「クレオール」と「辺境」の意味を考察し、ハーンがそれらを、近代社会で損なわれた人間性を回復させてくれる存在として描いていたということを指摘する。第5章「ラフカディオ・ハーン『ユーマ』における黒いキリスト像について—ジョージ・ワシントン・ケイブルとの比較から」でも、ケイブルの作品を換骨奪胎して書かれた小説として『ユーマ』(Youma, 1890)を読み直す。第6章「再話へ向かう旅—ラフカディオ・ハーンの旅行記」では、主に旅行記の分析を行い、ハーンが自分自身の内にある西洋中心的な思考様式を相対化している様子に目を向ける。

先ほども述べたように、ハーンのこの自己相対化の姿勢が最も鮮明になるのが晩年の再話文学であるというのが本論の主張である。第II部に収めた3つの章では、アメリカ時代と日本時代の作品を並べて論じ、それらを再話の助走段階として捉える。

第III部「再話する／されるラフカディオ・ハーン」に収めた3つの章ではこれまでの議論を踏まえて、再話をハーンの「西洋脱出」の最も大胆な試みとして論じる。まず第7章「ラフカディオ・ハーンの文学観とその実践としての再話」では、ハーンは翻訳論や口承文芸に対する認識、そして東京帝国大学で行った講義について考察することにより、日本時代の再話が結果として彼の文学観の実践になっていたということ、そしてそれが、西洋中心主義とそれに囚われた自己を相対化するための試みでもあったということを指摘する。

第8章「ラフカディオ・ハーンの再話手法—「破られた約束」「耳なし芳一の話」を例に」では、19世紀後半の英米のゴースト・ストーリーとの比較も交えながら、ハーンの再話手法と、書きかえがもたらした効果について探る。ハーンは、日本の怪談の中に、当時の西洋中心的な論理や倫理観では理解しがたい要素を見出した。そして、その異質性を自作の中に取り込むことにより、英米のゴースト・ストーリーの規範や、西洋中心的な価値観を揺さぶっていたのである。

ハーンは、原作者の意図に構わず日本の物語を自由に書きかえた。その彼の作品も、後世の人間—とりわけ日本人—によって書きかえられた。その結果、ハーン作品と、それをさらに再話した作品が併存することになった。最後の第9章「再話されるラフカディオ・ハーン—「生神様」を例に」では、このユニークな受容のされ方の一端をたどることにより、「西洋脱出」を試み続けたハーンにとって再話されることの意味を考察する。ハーンが生涯をかけて取り組んできたことは、近代西洋という、唯一絶対で確固とした立場を揺さぶること、西洋とそれ以外の辺境の文化にあると考えられていた価値の序列を無効にすること、そして、西洋的な振る舞いや思考に囚われていた自分自身を相対化することだった。第9章では、ハーンのこの姿勢を、その受容のあり方—それぞれ独自の価値を備えた多様な再話作品が生まれることにより、原典としての彼の作品の権威が相対化されてゆく—に重ねる。再話され類話が増えるということは、ハーンの再話文学の本質である開放性と多元性が促進されるということであり、彼にとって望ましい受容のされ方であるというのが第9章の主張である。

以上の議論を通し、本論では、ラフカディオ・ハーンの再話とは単なる物語の書きかえや、異国の文化の紹介に終わるものではなく、彼と西洋とのせめぎ合いの縮図でもあったということ、そしてそれが最終的に、西洋文明の絶対性に対して批判的であり続け、常に「もう一つ」の価値観を模索し続けたハーン、Lafcadio Hearnと小泉八雲という複数の名前を持つに至った彼にとってふさわしい文学のあり方であったということ論じる。

論文審査の結果の要旨

氏 名	木田 悟史
論文題目	ラフカディオ・ハーンの再話文学—西洋との葛藤の縮図として
要 旨	
<p>本論文は、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の再話文学（およびハーン作品を元にした再話文学）を考察し、そこに生涯にわたって「移動」を続けたハーンが西洋と葛藤する姿を見出そうとするものである。ギリシャで生れ、アイルランド、フランス、イギリス、アメリカなどの長距離の移動を経て日本にやって来たハーンは、日本人でさえあまり目を向けることのない古い口承説話を集め、妻の小泉セツにそうした原話を口述させ、それを英語で書きかえた。「再話」という行為により、ハーンが作家としての生涯をかけて行おうとしたことは、近代化の波にのまれて滅びゆく運命にある非西洋の周縁的文化を称えることにより、西洋中心的な思考や振る舞いを批判、相対化することであった。西洋とのせめぎ合いの中で、そこからの「脱出」の試みとしてハーンが取り組んだ独特の再話文学は、ハーンと西洋との葛藤の縮図そのものである、というのが本論文の主旨である。以下、三部・九章からなる本論文の各部および各章の概略を示す。</p> <p>第 I 部「再話の成立条件としての「収集」と「移動」—ラフカディオ・ハーンと西洋帝国主義」に収められた三つの章は、ラフカディオ・ハーンの再話文学の前提にある「移動」と「収集」という行為の意味について考察することにより、ハーンと西洋世界との関係を明らかにしている。第 1 章「アメリカにおけるラフカディオ・ハーンの収集活動」では、アメリカ南部の都市ニューオーリンズで本格的に作家活動を始めたときから、ハーンは「収集」という行為によって支えられていたことを同時代のアメリカ南部作家との比較を通して論じている。第 2 章「日本におけるラフカディオ・ハーンの収集活動」では、日本時代に焦点を移し、引き続きハーンは「収集」行為を追っている。アメリカ時代から日本時代まで、ハーンは作家として収集という行為を続けていたが、その目的は、近代化という強大な力にのまれて姿を消そうとしていた文化を保護することだった。その一方で、知識の収集とは、帝国主義諸国が他者を支配する際に依拠した行為でもあったことを、エドワード・W・サイード (Edward W. Said) のオリエンタリズムや、万国博覧会における異文化収集・展示についての研究などを援用して論証しようとしている。第 3 章「ラフカディオ・ハーンの移動の仕方—ラドヤード・キプリングとの比較から」では、ハーンと対照的な作家としてラドヤード・キプリング (Rudyard Kipling) との比較も交えながら、ハーンの再話のもうひとつの成立要件である「移動」という行為について考察している。ハーンの移動は西洋からの逃亡、「辺境」への移動だったが、その目的は、近代化によって失われつつあった多彩な文化を描くこと、そして、それを通して西洋文明の画一性を批判することだった。皮肉なことに、そのためにハーンは、他ならぬ西洋文明によってもたらされた、世界規模での交通機関の発展を最大限に利用していたのである。</p> <p>第 II 部「再話への助走段階—ラフカディオ・ハーン作品にみる西洋中心主義の相対化」に収められた三つの章では、ハーンの再話文学が、生涯をかけて西洋中心の思考様式では十分に捉えきれない価値観や美の存在を示し、西洋中心主義を相対化しようとする試みであったことを論証している。第 4 章「ラフカディオ・ハーン『チータ』におけるクレオールと辺境について—ジョージ・ワシントン・ケイブルとの比較から」では、ハーン最初の小説である『チータ』(Chita, 1889) をアメリカ南部ローカル・カラー作家ジョージ・ワシントン・ケイブル (George Washington Cable) と比較分析し、「クレオール」と「辺境」が近代社会で損なわれた人間性を回復させてくれる存在として、</p>	
主査記載 氏名・印	山本 秀行 印

ハーンによって肯定的に描かれていることを論証している。第 5 章「ラフカディオ・ハーン『ユーマ』における黒いキリスト像について—ジョージ・ワシントン・ケイブルとの比較から」では、ケイブルの作品を換骨奪胎して書かれたハーンの小説『ユーマ』(Youma, 1890) を分析し、ハーンが白い十字架を背負った黒いキリスト像という大胆な反転により白人中心の価値観を転倒し、ケイブルよりも先鋭的に奴隷制に対する白人の罪意識を浮かび上がらせていることを論証している。第 6 章「再話へ向かう旅—ラフカディオ・ハーンの旅行記」では、西洋人による植民地旅行記を分析したメアリー・ルイーゼ・プラット (Mary Louise Pratt) の理論を援用して、ハーンの本旅行記（特に隠岐諸島への旅行）の分析を行い、その中でハーンが自身の西洋中心的思考様式を相対化し、現地の歴史や文化との関わりに基づく新しい風景に到達したことを論じている。

第 III 部「再話する／されるラフカディオ・ハーン」に収められた三つの章ではこれまでの議論を踏まえて、再話をハーンの「西洋脱出」の最も大胆な試みとして論じている。第 7 章「ラフカディオ・ハーンの文学観とその実践としての再話」では、ハーンは翻訳論や口承文芸に対する認識、そして東京帝国大学で行った講義について考察することにより、日本時代の再話が結果として彼の文学観の実践になっていたということ、そしてそれが、西洋中心主義とそれに囚われた自己を相対化するための試みでもあったということを指摘している。第 8 章「ラフカディオ・ハーンの再話手法—「破られた約束」「耳なし芳一の話」を例に」では、19 世紀後半の英米のゴースト・ストーリーとの比較も交えながら、ハーンの再話手法とその書き換え行為がもたらした効果について考察している。ハーンは、日本の怪談の中に、当時の西洋中心的な論理や倫理観では理解しがたい要素を見出し、その異質性を自作の中に取り込むことにより、英米のゴースト・ストーリーの規範や、西洋中心的な価値観を揺さぶっていたのである。日本社会において周縁化された女性である妻の小泉セツの原話口述に基づくハーンの再話は、無からの創造や唯一不変であることを重視する近代西欧的な文学観とは無縁の口承文芸の流動的で柔軟なあり方を文字の世界で模倣していたと言える。第 9 章「再話されるラフカディオ・ハーン—「生神様」を例に」では、ハーン文学の再話としての日本における受容を考察し、再話されることによってハーンの再話文学の本質とも言える開放性と多元性が促進され、また、近代西洋という絶対的立場を揺さぶり、西洋とそれ以外の辺境の文化との間の価値序列を無効化し、自身の西洋的振る舞いや思考をも相対化しようとしたハーンにとって望ましいものであったと指摘している。以上の議論を通じて、本論文は、ラフカディオ・ハーンの再話とは単なる物語の書き換えや、異国の文化の紹介に終わるものではなく、彼と西洋とのせめぎ合いの縮図に他ならないと結論付けている。

本論文は、その元となるものの多くが学会発表や学会誌論文として既に公表されている。また、反帝国主義やオリエンタリズムなどの文化研究理論を援用しつつ、ハーン文学に「再話」という新しい視点から果敢に挑戦した本論文は、長い研究蓄積を持つハーン研究の現代的展開の可能性を示したものとして学術的意味は極めて高いと言える。

以上の審査結果をもとに、本審査委員会は全会一致で論文提出者・木田悟史が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有すると判断した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	山本 秀行 印	副査	准教授	芦津 かおり 印
副査	教授	菱川 英一	副査	准教授	奥村 沙矢香
副査	教授	大津留 厚 印			